

『八千穂村全村健康管理の50年』別冊

衛生指導員 ものがたり

松島松翠・横山孝子・飯嶋郁夫 共著

まえがき

かつて「東の沢内、西の八千穂」という言葉が流行った。沢内とは、岩手県の旧沢内村のことであるが、どちらも殆ど同じ時期に、村ぐるみの健康管理を始めた村である。八千穂村の全村健康管理で、他に見られない大きな特徴の一つは、地域の保健リーダーとして、男性の「衛生指導員」を設置したことであろう。

ただ衛生指導員とは、やや古めかしい呼び方だが、それにはこんな事情がある。昭和28（1953）年から30年にかけて、穂積村と畑八村（後に合併して八千穂村となる）だけで340人の赤痢の集団発生があった。これを機会に一層の衛生知識の向上と衛生環境の改善が求められ、八千穂村では、8人の環境衛生指導員をつくって、改善につとめた。当時は、下肥を肥料として使うために、便所はどこでも外便所であった。ここがハエとウジの巣窟になった。薬剤散布と、農家への実質的な衛生指導が必要であり、そのための環境衛生指導員であった。

昭和34（1959）年、全村健康管理が始まるとともに、環境衛生の仕事を持ちながらも、健康管理、成人病対策にまでに役割が拡がり、正式に「衛生指導員」という名になった。

若月先生は、これを「保健活動家」と呼んだ。住民から選ばれて地域で保健のために活動す

ることに、大きな意義を認めたのである。

また衛生指導員の「指導」という言葉も、現代ではあまり適当な言葉とはいえない。現代は「指導」ではなく、「協働」である。住民が主体となって、皆の力でつくり上げていくのが、本来の健康を守る活動である。当初は上から指導する形であったが、現在ではそうではない。このことは、衛生指導員自身もよく納得している。

ついでに述べておくと、健康管理の「管理」と言う言葉もよい言葉ではない。これには若月先生も触れておられるので詳細は省くが、「管理」というとどうしても「上から」という意味になる。健康を守る活動はあくまでも「下から」の取り組みが基本でなくてはならない。

八千穂村は、平成17（2005）年に合併して佐久穂町となり、合併後は、衛生指導員は「地域健康づくり員」と名前が変わった。本書では八千穂村時代のことを述べるので、衛生指導員という呼び名で通すことにしたい。

衛生指導員は、期待に応えて、やがて全村健康管理の要かゝりとなって活躍するようになる。しかしこの50年間、衛生指導員の活動が、必ずしもスムーズに運んだというわけではない。ときには衛生指導員同士で意見が割れたり、役場と対立したり、また一時は衛生指導員廃止問題も出た。これらについては「八千穂村全村健康管理の50年」にくわしく述べてあるが、いずれも衛生指導員の努力と団結で乗り越えてきた。これには、一つは地域から選ばれた衛生指導員とい

う名に、誇りと愛着があったからであろう。地域健康づくり員というハイカラな名よりも、衛生指導員という言葉の中に、多くの思い出がつまっているのだ。現に衛生指導員を辞めたあと、衛生指導員OB会をつくって、ボランティアで活動している方が大勢いる。

しかしこれからは新しい「地域健康づくり員」の活躍の場である。先輩たちの生き方を学びながら、地域のために頑張ってほしい。この別冊が、その一助となれば幸いである。

この「衛生指導員ものがたり」は、佐久病院の広報誌「農民とともに」のNo.85（2000年4月号）からNo.133（2003年3月号）まで、四年間にわたって連載したものをまとめたものである。

本書の発行にあたっては、佐久病院から多くの激励とご援助をいただいたことに深謝したい。また困難な事情の中で、短期間で発行に漕ぎつけていただいた(株)佐久印刷所に厚くお礼を申し上げます。

2011年3月

佐久総合病院名誉院長 松島 松翠

目次

まえがき

プロローグ・劇『見る』の衝撃

2 11

I. 健康管理が始まるまで

ノミ・シラミ・ハエの農家生活

赤痢大発生で村が変わった

16 20

ハエ退治と回虫駆除が最初の仕事

24

ヤギ・トリ・大豆で栄養改善

28

悲しい現実——結核と寝たきり

33

映画製作や農村調査に協力

37

II. 村ぐるみの健康管理が始まる

窓口徴収の反対運動の中で

44

健康手帳と健康台帳を備えて

48

小雪の中で健康健診始まる

結果報告会に力を入れて

毎月一回の学習会に取り組む

暖房入れて医療費が減った

農夫症対策に農民体操を始める

苦勞と悩み——受診率の低迷

Ⅲ. 衛生指導員と手を携えて

トラさんと衛生指導員たち

春の息吹に英気を養う「タラの芽会」

体中浴びた農薬・ホリドール

健康知識は上がったけれど

納屋工場の広がり村の中は大ゆれ

あいさつは「ズロース一丁!」

Ⅳ. 新たな健康管理への模索

健康管理をあらためて考える

「ヘルス」移行でさかんに論議

52

56

61

65

69

74

80

85

89

94

98

102

110

114

世代交代の衛生指導員たち

全国から視察が相次ぐ

ピッカピッカの一年生

胃の施設検診をすすめて歩く

V. 演劇活動で健康づくり

自主的な取り組みがすべてだ

よく食べ、よく飲み、よく学ぶ

健康大会から健康まつりへ

皆でつくった第一回健康まつり

はじめての演劇に取り組む

劇の上演で仲間づくりができた

VI. 衛生指導員に激動の嵐

健診日程に指導員会が反発

衛生指導員廃止の動きが出る

村民ドックでまたひと採め

乗り切った激動の四年間

179 174 170 166 160 156 151 147 142 138 132 127 123 118

激動の嵐は健康管理部にも

183

Ⅶ. セミナーと地区ブロック活動

指導員たちとセミナーをつくる

190

地域活動の推進役はセミナー同窓会

194

女性推進員とともに手を組んで

199

さらに進む地区ブロック活動

203

Ⅷ. 八千穂村のよいところ悪いところ

健康管理に助っ人現れる

210

ユニークな茂松・恒人コンビ

214

酒は涙か生きがいか

219

八千穂村の良いところ悪いところ

223

みんなで育てる八千穂の子

228

エピローグ・主役は住民

233

あとがき

240

プロローグ・劇『見る』の衝撃

八千穂村健康まつりで

平成元（一九八九）年十一月十二日、八千穂村福祉センター大ホールは、村の各地区から集まった人たちが異様な熱気に包まれていた。参加者のために床に敷かれた藁^{こぎ}座は、すでに隙間なく埋めつくされている。第六回健康まつりの最後のプログラム、劇『見る』が間もなく始まるうとしていた。

健康まつりに劇を上演するようになったのは、第二回するときからだ、今や健康まつりの演し物としてすっかり定着し、村の人たちも毎回それを楽しみに集まるようになっていた。

「見る」というのは、看護する、介護するという意味だが、ここでは、家庭での寝たきり老人の介護のことを指している。今ではふつうのことになったが、当時としては漸く老人介護の問題が論議されるようになったときで、健康まつりでも、二年前にボケ老人の介護を取り上げて以来、二度目の取り組みであった。

やがて幕があく。農村に多い三世代家族の家が舞台である。

父が会社員で、母が寝たきりの祖父の面倒をみている。しかしもう十年も経つので、母は看

病疲れて体の具合が悪い。一度診察を受けようと病院へ行った留守に、祖父が息を引き取ってしまう。案の定、駆けつけてきた親戚や父の兄弟たちから「嫁のくせにちゃんと看ていなかった」「病人をほっぽりだして家を空けるなんて」とひどい叱責を受ける。

やがて父が帰ってきて母をかばうが、親戚は納得せず、とうとう喧嘩になる。母は非常にづらい立場になるが、やがて祖父の弟が現れ、「寝たきりで何もできない俺を、嫁は一所懸命に介護してくれた。俺はこの十年寝たきりだったが、嫁のおかげで生きがいのある生涯を送ることができた」と、祖父の生前の言葉を伝える。一同、母の長い間の苦勞をあらためて感じ入り、お互いに反省しあうという筋書きである。

婦人部活動を変えた劇

寝たきり者を介護する家の人の苦勞は並大抵ではない。親戚や兄弟は一向に姿を見せず、文句だけは言うというのは、よくある話である。手は出さぬが口は出すのである。これが介護する人をさらに苦しめる。

ところで、劇の進行中にハプニングが起こった。父の妹役をやった女性が演技ではなく本当に泣き出してしまったのだ。自分も介護をやったことがあり、母の苦勞や心情がよく分かる。その気持ちを察して胸にジーンときたらしい。劇と自分の体験が重なってしまったのである。

観客もいっせいに泣く。みな同じような体験を持っているのだ。劇は感動の渦の中で幕を閉じた。

当時、臼田町農協で生活指導員をやっていた武田巳智子さんもこれを見て大いに感動し、衝撃を受けた一人である。早速そのビデオを借りて、町の全地区を上映して回った。

どこでも皆泣いた。

机上でつくられた内容ではなく、言わば隣の家の問題が劇になっているため、これは他人ごとではない。自分のことと考えあわせて胸におちるのである。

武田さんは、この劇を見て以来婦人部活動のやり方が変わってしまったという。演劇ということな分かりやすい問題提起のやり方があったのかと、あらためて劇のすばらしさを感じた。

以来、自らも、また婦人部の役員も含めて、地域を回って劇を上演するようになる。お年寄りの問題はとても深刻だというのは、各人の胸の中にはあるが、近所の例は当たり障りがあるので、なかなか具体的に口に出しては言いにくい。しかし劇を見て考えると、これは当たり障りなく物が言える。劇で問題提起しながら、その後で話し合うという健康教育方式ができ上がった。

劇は衛生指導員のいのち

劇「看る」は、八千穂村衛生指導員のときに高見沢佳秀さんが作った第五作目の劇である。健康まつり当日上演したのも、衛生指導員全員が取り組んだ。女性の配役は保健婦さんや婦人の健康づくり推進員の手を借りたが、その他の配役や裏方は衛生指導員が中心となつてつくり上げた。

高見沢さんは以後も劇を作り続け、その数は現在三十以上になる。その度に衛生指導員が皆で協力して上演している。

十五人いる衛生指導員は、八千穂村の全村健康管理の中でさまざまな活動を行っているが、演劇活動はその中の重要な活動の一つになっている。高見沢さんは次のように言い切る。「健康教育にとって劇の上演は最もよい方法だ。だから衛生指導員にとっては演劇活動はいのちだ」と。衛生指導員の演劇活動の詳細については、また稿を改めて述べることにしたい。

住民の中の保健活動家である衛生指導員、これは八千穂村独自の組織だが、もう四十数年の歴史を持つ。任期は四年だが、何期も続ける人もいる。当初とメンバーは全く変わっているが、その活動はずっと受け継がれている。

衛生指導員というのはどうして生まれたか。今までどんな活動を行ってきたか。その歩みを一つひとつ辿ってみることにしよう。

I

健康管理が始まるまで



小川でナベやカマを洗う家族

ノミ・シラミ・ハエの農家生活

ノミ、シラミとりの毎日

衛生指導員の生い立ちを語る前に、当時の村の衛生状況を少し説明しておかねばならない。話は四十数年前に遡る。

昭和二十年代もそろそろ終わりに近づこうとしていたが、農村の生活環境は依然として悪かった。食料も十分とは言えなかったし、衛生面ではさらにひどかった。

ノミやシラミは家の中のどこにでもいた。当時開業していた出浦公正医師によれば、往診に行くと、患者の側に座って布団をまくって診察するものだから、座っているうちに靴下の方からシラミが移ってきて、家に帰ってからムズムズ痒くて困ったという。

夜になれば、布団の中にノミやシラミが何処からともなく集まってきたり痒くて眠れない。誰かが痒いといえれば一斉に起きてシラミとりをやる。布団や毛布にたかっているシラミとその卵をみつけて、手でつぶしていく。また週に一度は、着た物を全部ぬいでたらいに入れ、そこへ熱湯を注ぐ。するとシャツの衿などにシラミが一列になり白くなって死んでいるのが見つかった。

とくに女の子の髪はいつもシラミでいっぱいだった。DDTができてからは、子どもの頭が真っ白になるほど、プカプカDDTをかけて、風呂敷で頭を縛って一晩経てばシラミはみな死んでしまった。

ハエを手で払い払い食事

ハエも家の内外を問わずブンブン飛んでいた。その発生源の一つは便所だった。便所はみな外便所で家の外にあったが、これは尿尿をすぐ肥料として使う必要性からだった。従って尿溜は露出していて、ハエが発生し増えていく温床となっていた。

それに大抵の農家は、主に農耕用に牛や馬を飼っていたが、畜舎は家と接して作られていた。というよりはむしろ家の中にあつたといつてよい。台所と土間続きだったからだ。牛馬の糞便にハエがたかる。それがもろに台所へ押し寄せる。だから家の中にハエが絶えることはなかった。

いざ茶碗にご飯を盛ると、待ち構えたようにハエがいつせいにたかってくる。それを手で払い払い食事をする。そのことを誰も不思議とは思わなかった。

当時は水道はなく、井戸水か川の水を使用していた。川がない地区では井戸水しか使えなかったが、川でいろいろな物を洗うのがふつうだった。

ナベやカマを洗ったり、茶碗など食器も洗った。野菜も洗ったが、野沢菜などは川で洗ったまま漬けることもあった。水の澄んだところは飲むこともあった。「三尺流れれば水はきれいになる」というのが常識とされていた。しかし一方では、川でおむつを洗ったり洗濯もした。これが問題で後日の赤痢発生のもとになった。

穂積の穴原地区は地下水も川もないところである。ここでは生活用水として、地区のほぼ中心にある「石舟」というのを利用した。石舟というのは、湧き水を樋（とい）で引き、貯水のために石でつくった水槽である。ナベ、カマ、洗濯物などを籠に入れ、背負ってきて石舟で洗う。飲み水にも使ったから汚染がやはり心配だった。

据え風呂は肥料づくりに

風呂桶も便所と同じく、みな戸外にあった。尿溜の上に立てた据え風呂である。これも風呂の残り湯を尿と一緒にして肥料として使うためだった。

当時は風呂は一週間に一度ぐらい立てるのがふつうだった。その代わり近所で交代で立てて、一つの風呂を共同で利用した。

嫁さんが風呂を立てると、姑さんが「今晚風呂を立てたから、来ておくんなんしよ」と近所に言っただけ。すると夕食後、近所の人たちが、「おつかれでやす。ふろを貸しておくんなんし」

と次から次へと訪れる。いろいろで順番を待つ間に、お茶を飲みながら世間話をする。嫁さんは火を燃やしたりお茶を入れたりして、一番最後に風呂に入る。その頃は風呂の湯も少なくなり、大分汚れている。

一回に十五人も入るのだから当然ともいえるが、できるだけ多くの人に入ってもらって、汗や垢でとろとろになった、つまり肥料効果たっぷりの湯を尿溜に払うのが良いとされていた。

体を洗うのはすべて風呂の中で、外で洗ったり石鹸を使うのは許されなかった。肥料効果が落ちるからである。それ以前、石鹸のない頃は、洗濯するにも頭を洗うにも、糞を燃やし灰をザルに入れてお湯をかけて灰汁を取り、その水で洗ったという。こちらの方がむしろ肥料効果があるとされた。

外便所や戸外の据え風呂の衛生上の問題点はもう一つあった。冬の寒さの害である。

いろいろと炬燵こたつだけの暖房では、部屋の中自体もそう暖まるわけはなかったが、冬の夜の戸外はさらに寒く、大体が零下十度近くになる。外便所では夜中に温まった体を急に寒い外に曝すことになるので、急激な血圧上昇を起こし脳卒中の引き金になった。

昔は今のような布団はなく、みな藁布団だった。秋取り入れの後に十センチくらいにぎざんだ藁を詰め込んで厚さ三十センチの藁布団をつくる。その上にせんべい布団を重ねて寝る。これは案外温かったが、埃が多く出るのが欠点だった。

ともかく、いろいろな面で当時の農村環境は現在では想像もできないくらい悪かった。衛生面からいえば、いつ伝染病が発生してもおかしくない状況だったが、やがて穂積地区で、県下随一といわれる赤痢の集団大発生が起こることになる。

これが村を揺るがす大事件となった。

赤痢大発生で村が変わった

赤痢が二百二十二人発生

畑八村と穂積村が合併して八千穂村になったのは、昭和三十一年のことだが、その少し前、昭和二十八年に穂積村で赤痢が集団発生した。患者はあわせて二百二十二人に達したが、この大発生は県下第一ということで、村中大騒ぎになった。

発生源は穂積小学校で、患者の大部分は児童だった。そのうち児童から家庭へと広がり、ついには穂積村全村にまで及んでしまった。保菌していた子供が学校で相撲をとって遊んだだけで、村中に移ってしまったという噂があったが、原因は学校の水からの感染であった。

学校に簡易水道が入っていたが、断水に次ぐ断水で十分消毒できない状況であった。これが、